すみれ亭句会（新年句会）会報６４（平成二十三年二月十七日　あかぎ倦鳥

第一部　当日句会（雑詠の部）

春暁の光と闇に母在す　　善啓改め　業　平

先般ご母堂を亡くされた氏のご母堂に捧げる痛恨のレクイエムである。全人生を「光と闇」と抽象化することにより勁健な秀句となった。

海、遠い海よ！　僕らの使ふ文字では、お前の中に母がゐる。そして母よ、仏蘭西人の言葉では、あなたの中に海がある。　　（三好達治『郷愁』）

この簡潔な一句がたくさんの共感も得ました。

一点「をれり」を「在す（おはす）」に直させていただいた。敬意をさらに厚くするためである。

かさこそとすべり落ちてる春の鳥　　西　風

冬の朝昨夜の残りいただきます　　靖

（席題の部）　春浅し・早春・春の鳥（春禽）・二月尽

白鷺も手もちぶさたや二月尽　　しろう

新年句会当日の午前十一時三十二分後楽園内の吟。私はその五分前に同氏ご夫妻とすれ違ったのである。同園の大泉水から流れ出る龍田川は浚渫工事中でほぼ干上がり、泥沼には無数の鳥の足跡が和服の柄のようである。あれは何の木かと眺めると、一羽の白鷺が留まっているのであった。

確かに川ざらえでは、水辺に近づくこともできない。彼は「二月もそろそろ終りか」と手もちぶさたであったのである。

春の鳥はやりの病にかかるなよ　　満紀子

早春や声高らかにカンツオーネ　　河　童

第二部　月例句会

百花逍遥（当季雑詠）

天

真つ白な客船で発つ春への旅　　ま　さ

カリブ海、エーゲ海、そして地中海クルーズが世界三大クルーズであろうか。

例えばフロリダのマイアミ港からは、十万トン級の大型客船が次々と出航する時期がある。壮大な夕焼の下、デッキ・ランチ、プール、カジノ、映画など贅を尽くした娯楽が提供される。

掲句、「真つ白」が利いている。「春への旅」であるが、季節は厳密に春でなくとも良い。今まさに人生の旬、人生の春へと旅立つのである。

アドリアの朝の小径で初音きく　　晶　子

イタリア半島の東側がアドリア海である。

以前は東欧諸国の始まるところであったので、日本人には比較的なじみが薄いかもしれない。その素朴な町での朝の散歩であろう。思いがけなく小鳥の初音を耳にしたのだ。本来初音とは、わが国の鶯が、その春に初めて発する声である。が、ここは異国であるからしてサヨナキドリ（ナイチンゲール）でも黒鶫でも構わない。

要は異国で聞いた美しい春告鳥の印象がなんとも忘れ難いのである。

屠蘇一献一献重ねて酔いつぶれ　　靖

さて無事に帰国して迎えた正月。
お屠蘇を祝う風習もだんだんと薄れていると聞くが、真鍋家ではしっかり酌み交わす習慣。あの薬草からくる独特の香りは、まさに一年の邪気を祓うにふさわしい。家族そろって年少者から組み盃を回し飲みする。
いま作者は、来し方行く末とじっくりと対局し、いとおしむように屠蘇を味わう。やがて杯を重ねるうち、登仙境に達する。廃れゆく風習への傲然たる挑戦なのである。

地

その昔神の給いし柳葉魚焼く　　雅子

柳葉魚と書いてシシャモ。世界中で北海道にしか獲れないのだという。「神の給いし」はアイヌの神で、そもそも「柳の形をした魚」のアイヌ語。卵が飛び出したりして焼くのが難しいがそれもそのはず、カペリンという似て非なる輸入魚に卵を注射する。

ロバート家今年も遅き松納め　　しろう

まずいわく有りげな「ロバート氏」に惹かれる。東京では六日の夕、京阪では十四日の夕方に松をおさめるしきたりであるが地方によって日にちは一定しない。
「ミスターロバーツ、間もなく二月ですよ」「早く外すと松がモッタイナイでしょ！」

ふるさとを去りし人への寒見舞　　和代

小寒から寒明けまでのお見舞いで、主に年賀のはばかられた方に差し上げる。賀状とは異なり、真情がこもってしんみりした暖かさがある。
いかなる事情か、ふるさとを引き揚げた人へのお見舞いである。

住き仲間負けも楽しき初マージャン　　智昭

このような句をぬけぬけと詠める作者の正体は神様かはたまた神でも鬼神か。
場所代まで負担してニコニコと振り込んで下さるのでしょうか。それとも今日は正月だからいいよ。風評とは裏腹にビタ一文負けることなく根こそぎ・・？

見つめ合うシニアの二人二月尽　　冬草

意味深長な句であると申し上げたほうが良いのか、更に深い意味があるのかもしれない。
ここではあまり深刻には捉えず、偕老洞穴、共白髪まで生きて来られた人生をほっとして二人して振り返っておられるのか。言外の余情を味わうべきなのであろう。

目刺焼く路地に野良猫侍りをり　　まさ

あり、をり、はべり、いまそかり。猫が多いのは尾道あたりであろうか。

一句一命いよいよ冴ゆる冬の月　　しろう

それほどまでに打ち込んでいただいてるのか。ナビゲーターとしては最高の境地。

人

大雪や古里埋まり音もなし　　信貴

作者のご出身は青森県。今年はとりわけ大雪が報じられた。観光客の喜ぶ豪雪も心痛む。

白梅の香り弦（ゆがけ）に移りけり　　弓人

「ゆがけ」とは、弓を引く右手に履く鹿皮の手袋。白梅の香をそこに感じる心のゆとり。

友眠る蝋梅の季（とき）墓に立ち　　藤　則（日）

蝋梅の香は冬の名残り。だが葉がないのですこし寂しい。この季節友の命日である。

急須欠け梅を見がてら陶器市　　満紀子

日常の必需品を壊してしまった。梅見がてら市場によって来ようか。

夢うつつ狐火一閃真夜厠　　西　風

冬の雨夜、野末に浮遊する燐火で鬼火ともいう。王子が有名だが氏はどこにおられる？

煮凝を傍（かたえ）に寄せて生一本　　豊　嗣

昔は寒い厨で偶然にできた煮凝だが現在では正式な料理。鯛の煮凝に灘の生一本。

しろくろに三毛トラ集い春近し　　清　龍

猫族は朝晩、ご近所で集まって集会を持つ習性。いろいろと情報を交換する。

風なごむ寒押し込めて春立ちぬ　　黄　雀

今年の立春は旧正月とかさなるめでたい暦であった。寒くとも寒くはない立春。

とちおとめ異常気象で高値呼ぶ　　河　童

郷土愛に燃える作者、異常気象による高値、江戸時代なら米相場で蔵が立った。

おでん喰ひ佳き酒あふり夜を行く　　業　平

このところ氏は意気軒昂だが、夜遊びの方も激しいのだろうか？

（講師自句自解）

留守番の犬と二人の豆を撒く　　倦　鳥

今年の節分は、義母の世話で妻が実家に戻った折で、犬と二人であった。ひどく煎り豆の好きな奴で、年の数の十三粒にせよという命令に違反し、それ以上に拾い歩く。翌日表に出ても家によって欲しがる豆と、見向きもしない豆のあることに気がついた。一体、豆の質の差か？

千代之介と名づけた愛くるしいシーズーであったが、今月十五日心不全で急死した。それまで朧げにしか見えなかった死という問題が、いよいよ露見する思いであった。

鳥兜の森　兼題「節分」（出題）黄雀、（選）業平

兼題「節分」という極く限られた「一日間の季語」を、どんな風に料理してくださるか、出題者としては興味津々の面持ちでありました。

会員もみな古希の坂を越えたいま、やはりおじいちゃん、おばあちゃんの心情を詠った内容が数多く、味わいのある佳句が勢揃いしました。

天

老声は隣に負けじ豆を撒く　　智　昭

節分や福に限りのありぬべし　　弓　人

赤鬼もひと夜明ければ豆拾い　　黄　雀

節分の数えし豆もうやむやに　　晶　子

節分や心の鬼は逃げて留守　　西　風

（あとがき）「今日という日は残された一番最初の日」とローマの諺。私共も毎日を大切に。